

## 幼児期の空想の友達とその周辺現象に関する調査研究 (2)

富田 昌平<sup>1</sup>

### Preschool Children's Imaginary Companions and Related Phenomenon (2)

Shohei Tomita<sup>1</sup>

This research expanded the result by Tomita & Yamazaki (2002) that investigated it about preschool children's imaginary companions and related phenomenon. The parents of 217 children were completed a self-administered questionnaire. The results revealed that the incidence of imaginary companions, personified objects, and impersonation games were 9.7%, 56.7%, and 82%. Regarding the contents of fantasy, boys created supercompetent characters who were more competent than themselves, whereas girls created incompetent characters who were less competent than themselves. IC (Imaginary-companion) groups and PO (personified-object) groups were more likely than NP (non-possession) groups to be firstborn or only children. IC groups and PO groups were received more magical explanations by their parents in comparison with NP groups.

**Key Words:** imaginary companions, fantasy, magical explanations, sex differences, early childhood

#### 問題と目的

2001年2月6日付の「よみうり教育メール」に、次のようなメールが寄せられていた ([www.yomiuri.co.jp](http://www.yomiuri.co.jp))。

「4歳の娘のことです。彼女の心の中では、玄関の扉にかかっている郵便受けに、仲良しの『あびびおじさん』が住み着いているようです。何かあるとすぐに『おじさんに相談する』とか、しかられた時にでも『おじさんがいいっていうんだもん』などといいます。ユニークで面白いとも思えますが、あまり自分の世界を作りすぎるのも、なんとなく不安です。」

さて、このような事例は日常まれな事例かといえ、実はそうではない。発達心理学者や精神分析学者たち

の間では古くから“空想の友達”(imaginary companions)として知られる現象であり、特に北米を中心に研究が行われてきた。また、作家のゲーテ、マーク・トウェイン、映画監督のスピルバーグ、ウッディ・アレンらによる幼年期の回想録などから、欧米では一般の人々にも広く知られている (Singer & Singer, 1990)。

空想の友達とは、子どもが空想によって作り出した目に見えないキャラクターのことであり、ある一定の期間、それは子どもの日常の会話の中に出現する (Svendsen, 1934)。それは対等の遊び相手であったり、しつけるべき子どもであったり、たくましい年上の人であったりする。かつてこの現象は、青年期に見られる精神医学的な問題を乳幼児期において予見するものと目された時期もあった。しかし近年では、空想の友

1 山口芸術短期大学保育学科講師

達は子どもが日々直面する現実の困難さや辛さを乗り越えていくためのクッション役となり、後の創造的な想像力、適切な社会性、たくましいパーソナリティの獲得に向けて重要な機能を果たすなど、肯定的な側面が指摘されている (Singer & Singer, 1990; 富田, 2002)。

しかし、わが国ではまだ一般的認知度も低く、わが子が空想の友達を持った場合、親は「気味が悪いからやめて欲しい」といった感想を持つことが多いことが報告されている (川戸・遠藤, 2001)。また、空想の友達はしばしば、子どもが悪いことをして叱られているときにスケープゴート的な存在として現れたりすることから、親からしてみると、「この子はずるい性格を持って生まれたのではないか」とネガティブに捉えられ (立花, 1994)、発達的に意味ある一過性の出来事として捉えられ難いといった問題もあるようである。これらは空想の友達現象の背景にある意味に対する認識の薄さによるものであり、わが国においてまだこれらの現象が認知されていないことの現れだといえる。

わが国における空想の友達の基礎的研究は、決してないわけではないが、その数は極めて少ない。著者が知る限りでは、麻生 (1989) による短大生 154 名を対象にした調査、犬塚・佐藤・和田 (1991) による大学生 1013 名を対象にした調査、川戸 (2002) による幼稚園・保育所に通う幼児の保護者 609 名を対象とした調査の 3 つしかない。このうち前者 2 つは大学生による回想に頼ったものであるため、その事例の多くは児童期以降のものであり、少し質も異なるように思われる。わが国において空想の友達の認知度が低いこと、事例が確認された場合でも表面的な理解の仕方しかされないこと、わが国独自の基礎的研究が少ないこと、わが国の子どもたちによる事例があまり紹介されていないことによると思われる。

こうした実状を踏まえて、著者は昨年、第 1 回目の調査結果を報告した (富田・山崎, 2002)。具体的には、3 歳から 6 歳の子どもを持つ親 85 名を対象に質問紙調査を行い、次のことが示された。(1) 空想の友達、事物の擬人化、なりきり遊びの出現率はそれぞれ 12%、51%、75% である。(2) 空想の友達はしばしば中間的存在として現れるのに対して、事物の擬人化は保護すべき存在であり、なりきり遊びのキャラクターは憧れの存在である場合が多い。(3) 空想の友達を持つ、事物の擬人化を行うなど空想傾向の強い子どもほど、家庭において親による魔法的説明を多く経験している。

本研究では、昨年に引き続いて基礎的な調査研究を行い、わが国における空想の友達についての基礎的なデータを提供するとともに、その具体的な事例を紹介する。併せて、前報で示された結果を再検討すること

を目的とする。

## 方 法

### 1. 被験者と手続き

山口市、防府市、小野田市、下関市の 4 つの幼稚園・保育園に在籍する園児の保護者 322 名に担任を通じて質問紙を配布し、一週間後に回収した。回収された 217 名 (男児 105 名、女児 112 名) のデータを分析の対象とした。年齢の内訳は、3 歳未満児 11 名 (男児 5 名、女児 6 名)、年少児 40 名 (男児 20 名、女児 20 名)、年中児 90 名 (男児 37 名、女児 53 名)、年長児 76 名 (男児 43 名、女児 33 名) である。回収率は 67.3% であった。

### 2. 質問内容

質問項目は先行研究 (Gleason, Sebanc, & Hartup, 2000; Rosengren, & Hickling, 1994; Singer, & Singer, 1981; Taylor, & Carlson, 1997) を参考に設定した。以下は質問の要約である。

1. お子さんは空想の友達を持っていますか？どのくらいの頻度で現れますか？その特徴は？
2. お子さんはぬいぐるみや人形を生きた友達のように扱いますか？どのくらいの頻度でそれをやりますか？その特徴は？
3. お子さんは動物や別の何らかのキャラクターになりきって遊びますか？どのくらいの頻度でそれをやりますか？その特徴は？
4. お子さんは何人きょうだいの何番目ですか？
5. もしもお子さんが自動ドアについて説明を求めてきたら、あなたはどのように答えますか？
6. お子さんの質問に対して「それは魔法なんだよ」といった回答をすることは日常どのくらいありますか？
7. お子さんが日常において科学的な説明を要する質問をすることはどのくらいありますか？

調査ではその他に、一人遊び、共同遊び、おもちゃ、色の好みについても尋ねたが、本論文では取り上げないこととする。なお、質問のより詳しい内容については富田・山崎 (2002) を参照のこと。質問紙にはフェイスシートを付し、そこに本調査のねらいと秘密厳守について記入した上で、協力をお願いした。

### 3. 実施時期

2001 年 10 月から 11 月。

Table 1 各現象の年齢別、性別、全体の出現数と比率

		N	空想の友達		事物の擬人化		なりきり遊び	
			人数	%	人数	%	人数	%
年齢別	3歳未満児	11	1	9.1	7	63.6	5	45.5
	年少児	40	5	12.5	20	50.0	33	82.5
	年中児	90	14	15.6	55	61.1	78	86.7
	年長児	76	1	1.3	41	53.9	62	81.6
性別	男児	105	5	4.8	42	40.0	88	83.8
	女児	112	16	14.3	81	72.3	90	80.4
全体		217	21	9.7	123	56.7	178	82.0

## 結果と考察

### 1. 出現状況

Table 1 は、空想の友達、事物の擬人化、なりきり遊びの年齢別、性別、及び全体での出現率を示したものである。ここで事物の擬人化とは、ぬいぐるみや人形などを人間のように扱う行動を指し、なりきり遊びとは、別の人格になりきって遊ぶ行動を指す。ともに空想の友達とかかわりが深いとされていることから取り上げた。

Table 1 から分かるように、空想の友達を持つ子どもの出現率は 9.7%であった。この割合は 20-30%という米国のデータ (e.g., Taylor, & Carlson, 1997) と比べて少ないが、日本の大学生による回想報告 (犬塚・佐藤・和田, 1991) での出現率 9.8%や、最近報告された福岡市の幼稚園・保育園児 609 名 (川戸, 2002) における出現率 8.6%とほぼ一致する。ただし、年齢別の箇所に示したように、年長児では 76 名のうち空想の友達を持ったことのある子どもは 1 名しか確認されなかった。空想の友達の出現は 2 歳から 4 歳頃がピークであるという先行研究 (Svendsen, 1934) の結果を考えると、今回の出現率は年長児を持つ親による忘却の可能性を考慮に入れた上で取り扱う必要があるかもしれない。主要な出現時期である 4 歳 (年中児) までのデータをもとに出現率を算出した場合、その値は 14.2%となる。年長児を持つ親たちが、わが子による空想の友達現象を忘れてしまっているのか否かは今回の結果のみでは分からないが、回想を要求する調査においてどの年齢までを対象とするかは今後の課題であるといえよう。

ところで、アメリカ (20-30%) と日本 (10%) とを比較した場合の出現率の違いに関しては、いくつか理由が考えられるが、主には次の 2 つによるであろう。第 1 に、アメリカは日本とは異なり添い寝をしない文化であり、ゆえに日本と比べて移行対象 (お気に入りの毛布やぬいぐるみ; Winnicott, 1971) を持つ子どもが

多い。乳幼児期に移行対象を持つ子どもは、アメリカ 60-65%に対して日本 30-35%という結果が示されている (遠藤, 1990; 藤井, 1985; Litt, 1986)。先行研究では、移行対象を持つ子どもの何人かが、その独特の心地よさや統制感を手放す過渡期に、旧には手放すことができないため代償的に空想の友達を持つようになるとも言われている (Singer, & Singer, 1990)。以上のように、移行対象との連続線上に空想の友達を捉えた場合、わが国では移行対象そのものを持つ子どもがアメリカと比べて少ないため、空想の友達を持つ子どもも少ないと解釈することができる。

第 2 に、日本では空想の友達に対する認識はまだ薄く、そのため親たちは、我が子が空想の友達と話をしている様子を見た場合、「気味が悪い」「恥ずかしい」からできればやめて欲しいという感想を持つことも多いようである (川戸・遠藤, 2001)。質問紙調査の欠点として、回答者のネガティブな考えが反映されにくいということがあり、そのため、たとえ自分の子どもが空想の友達を持っていたとしても、そのように回答しなかった親たちが何人かいた可能性が考えられる。つまり、実質的な出現率はもっと高い可能性もあり得る。

### 2. 性差

Table 1 に示したように、空想の友達、事物の擬人化、なりきり遊びの各現象の出現率には性差が見られた。そのため性差の原因について探るために、質問の結果得られたエピソードをもとに、その特徴を「憧れ型」、「仲間型」、「世話型」、「その他」に分類した。Figure 1 は、各現象の特徴を性別で比較したものである。分類は以下の基準に従った。「憧れ型」: テレビのヒーロー/ヒロイン、超越的な力を持つ存在、怪物的な存在、大人、年長者など、当該の子どもよりも力が強いものが描かれている場合。「仲間型」: 子どもとおよそ同年齢あるいは地位的に同格の子どもや存在が描かれている場合。「世話型」: 当該の子どもよりも年少

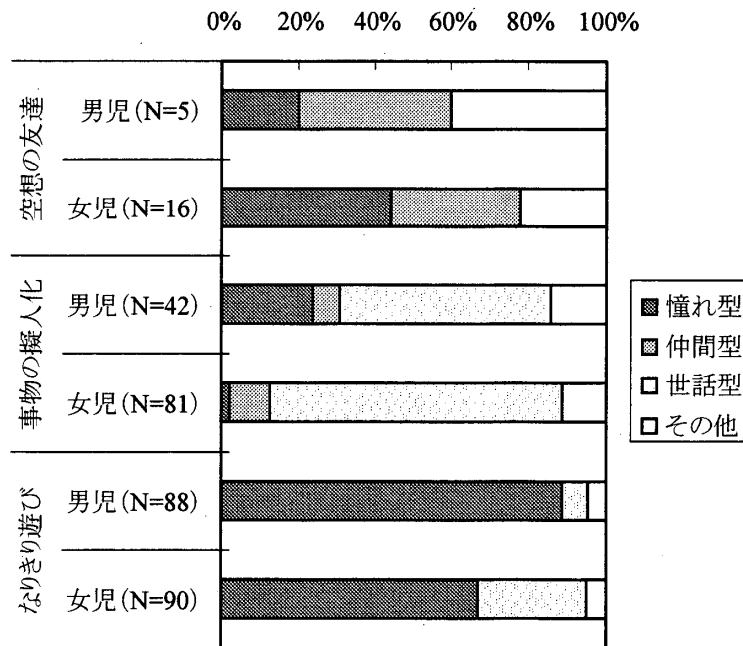


Figure 1 空想の友達, 事物の擬人化, なりきり遊び  
における特徴の性別比較

の子どもや赤ん坊, ペット動物などが描かれている場合。「その他」: 上記のいずれにも該当しない場合や, 現象の内容が不明である, あるいは無回答である場合。エピソードの内容は多様であったため, 一つのエピソードが複数のカテゴリーにまたがることもあった。ゆえに, データは排他的でなく, 統計的分析は行わなかった。分類は短大生 4 名がおよそ四分の一ずつ行った後, 著者との協議の上で行った。なお, 保護者による自由記述から得られたエピソードの具体例は, 資料に示すとおりである。

まず, 空想の友達に関しては, 男児よりも女児において報告が多く見られた。先行研究でもいくつかの研究において同様の結果が示されており, 例えば, Taylor & Carlson (1997) では調査した 3-4 歳児 152 名のうち空想の友達を持っていた幼児は男児で 20%, 女児で 35%であった。この男女による出現率の違いには, 男児なり女児なりの憧れや願いの違いが関係しているのではないかという指摘がある。例えば, Harter & Chao (1992) は, 男児は自分にはない強さや能力を備えた空想の友達を作りやすいのに対して, 女児は身の回りの世話が必要であるような空想の友達を作りやすいことを報告している。Figure 1 を見る限り, 本研究ではそのような違いは確認できなかったが, これはデータの少なさによるのかもしれない。

事物の擬人化もまた男児よりも女児において多く見られたが, この場合の事物は多くがお人形かぬいぐるみであり, 女児はそれを世話したり保護したりすべき赤ん坊やペットのような存在として関わるが多

かった。Figure 1 にも示されているように, 女児では男児よりも世話型が多く見られた。この点に関しては, 事物の擬人化は玩具の獲得がきっかけとなって始まる事が多く (Gleason et al., 2000), 親は男児に対してよりも女児に対してお人形やぬいぐるみを買って与えることが多いため, 世話型という特徴を持つ事物の擬人化が女児に多く, また全体の出現率も多かったものと思われる。

なりきり遊びに関しては, 出現率の上では性別による違いは見られなかったが, そのなりきるキャラクターの内容に違いが見られた。男児においては仮面ライダー, ウルトラマン, スーパー戦隊ものなど憧れ型のキャラクターが多くあげられたのに対して, 女児においてはセーラームーンやおジャ魔女どれみなどの憧れ型ももちろん多かったものの, 同時に犬や猫などのペット動物やハム太郎など世話型のキャラクターが多くあげられた。その違いは Figure 1 に示されている。この点に関しては, メディアが提供するキャラクターの男女差がそのまま反映していることもあり, 一概に論じることはできないが, この時期, 男児が力強い何かと友達になったり, それ自体になりたがっているのに対して, 女児は世話をする何かや周りから世話を焼かれる何かになりたがっていることを表しているとも言えよう。

### 3. きょうだい構成との関連

幼児期における空想の友達の所有とその他の周辺現象との関連について調べるために, 以下の基準に従

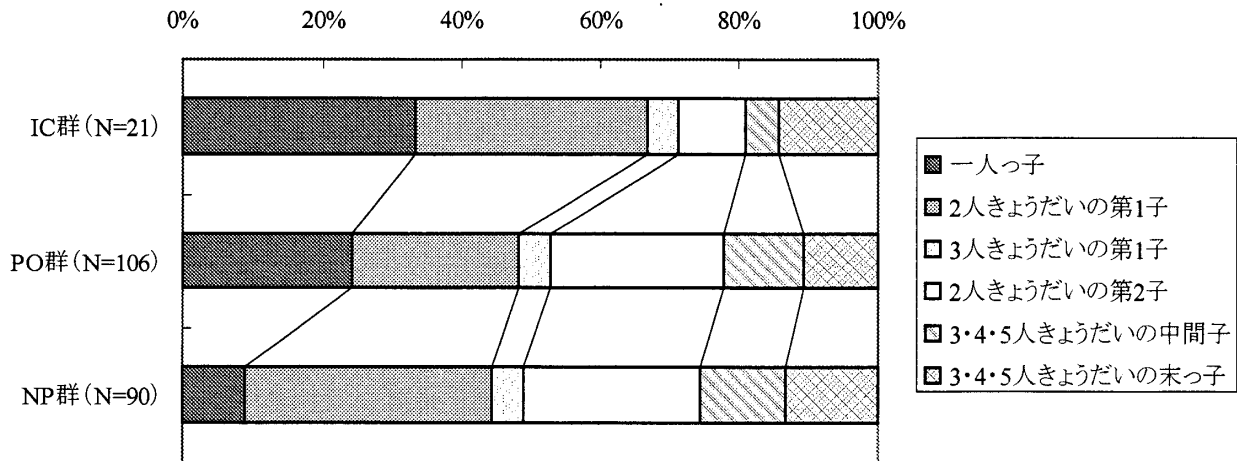


Figure 2 きょうだい構成の群間比較

って、子どもを3つの群に分類した。「IC (Imaginary Companion) 群」：空想の友達の現在あるいは過去の所有が報告された子ども (21名, 男児5名, 女児16名)。

「PO (Personified Object) 群」：事物の擬人化の現在あるいは過去の所有が報告された子ども (106名, 男児38名, 女児68名)。「NP (Non-Possession) 群」：上記2つの現象の報告がなかった子ども (90名, 男児62名, 女児28名)。

次に、空想の友達の所有ときょうだい構成との関連について調べるために、きょうだい数と出生順位のデータをもとに、子どもを「一人っ子」、「2人きょうだいの第1子」、「3人きょうだいの第1子」、「2人きょうだいの第2子」、「3・4・5人きょうだいの中間子」、「3・4・5人きょうだいの末っ子」に分類した。Figure 2はその群別の分布を示したものである。群間差について検討するために、子どもを「ひとりっ子」、「第1子」、「第2子以下」に分けて、 $\chi^2$ 検定を行ったところ、有意差が見られた ( $\chi^2_{(4)}=12.34, p<.05$ )。残差分析の結果、NP群よりもIC群とPO群において一人っ子が有意に多いことが示された。

以上の結果は、空想の友達を持つ子どもは第2子以下よりも一人っ子や第1子に多いという先行研究の結果 (Gleason et al., 2000; Svendsen, 1934) と一致する。かねてから発達心理学や精神分析学の分野では、空想の友達は子どもが孤独を感じたとき、その寂しさを紛らわし、補うために創作されるとする補償仮説が唱えられている。この場合、空想の友達は子どもが欲する遊び相手とのきずなを補償し、充足させる役目を果たす。これによって子どもは孤独や寂しさといった心の乱れを和らげ、現実への適応を高めるとされている。先行研究では、両親の不仲や離婚、きょうだいの誕生、親の病気などとの関連も指摘されており、空想の友達

の創作動機を説明する上で有力な要因の一つに数えられている (富田, 2002)。しかし、この結果は慎重に扱われる必要がある。なぜなら、前報の富田・山崎 (2002) ではこれを支持する結果が得られておらず、またいくつかの先行研究 (Manosevitz, Prentice, & Wilson, 1973) においても関連性が見出されていないからだ。ただ、少なくとも次のことは言える。孤独や寂しさが動機と聞くと、親からすれば空想の友達は不吉な兆しのように感じられるかもしれないが、このような解釈は誤りである。空想の友達自体は子どもが将来に向けてたくましく成長していくためのクッション役として機能するものであり、それ自体には罪はなく、むしろ良い方向へと影響を及ぼすものであるから、親はそれを引き離そうとせず、見守ることが重要である。

#### 4. 家庭での言語的交流との関連

「自動ドアの仕組みについて子どもに尋ねられたとき、どのように説明するか」という質問から得られた回答を、以下の基準に従って、「科学的」、「魔法的」、「回避的」、「分類不能」、「無回答」に分類した。「科学的」：メカニズムを科学的に説明した場合 (例；「機械で、人が来ると重さで開くドア」、「このドアは前に立つと、手を使わなくてもひとりで開いたり閉じたりできるドアなんだよ」)。「魔法的」：呪文など魔法的に説明した場合 (例；「ここに立つとドアに魔法がかかって開くんだよ」、「ひらけゴマっていう呪文を唱えると開くドアだよ」)。「回避的」：直接的な回答を避けたり、一時的に保留したりした場合 (例；「不思議だねえ、どうして開くのかなあ。○○ちゃんはどう思う?」、「『何でかねー』とだけ言う」)。「分類不能」：上記のいずれにも分類不能であった場合。Table 2は各回答カテゴリーの出現数と比率を群別に示したものである。

Table 2 空想の友達の所有と自動ドアに対する説明内容との関連

	N	科学的	魔法的	回避的	その他	無回答
IC群	21	13 (61.9)	1 (4.7)	3 (14.2)	2 (9.5)	2 (9.5)
PO群	106	67 (63.2)	10 (9.4)	7 (6.6)	10 (9.4)	12 (11.3)
NP群	90	58 (64.4)	7 (7.7)	6 (6.6)	7 (7.7)	12 (13.3)

( ) 内は百分率を示す。

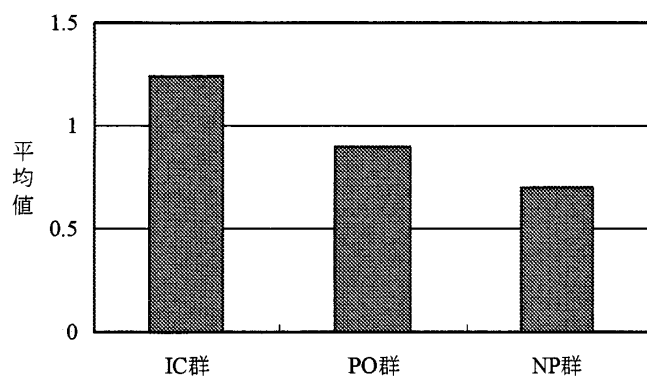


Figure 3 親による魔法的回答の群別の頻度

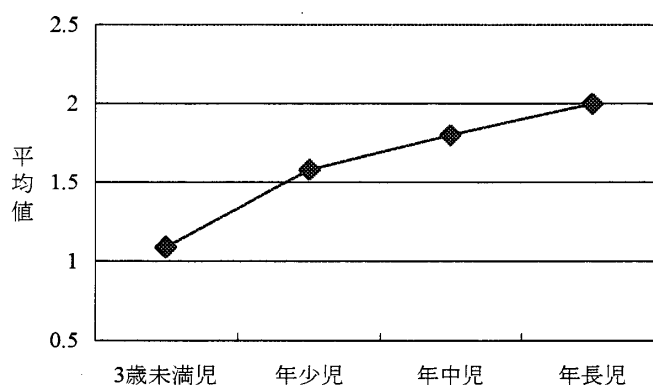


Figure 4 子どもによる科学的質問の年齢別の頻度

群間差について検討するために $\chi^2$ 検定を行ったところ、いずれも有意差は見られなかった。全体的に「科学的」回答を記述した親が最も多く(63.5%)、「魔法的」回答(8.3%)や「回避的」回答(7.4%)は少なかった。また年齢についても同様に検定を行ったところ、有意差は見られなかった。「自動ドア」という特定の事例について尋ねたために、親たちの回答の中には、そのときの子どもの年齢による、自分に余裕があるかどうかによるなど、状況によって変動することを示唆する回答がいくつか見られた。従って、この質問に対する回答が科学性や魔法性に対する親の態度を反映しているかどうかについては疑問が残る。今後の検討が必要であろう。

次に、子どもの何らかの質問に対して「それは魔法なんだよ」と説明をする頻度を4段階で評定してもらった結果を、次のように得点化した。「よくする=3」、「たまにする=2」、「一度だけある=1」、「一度もない=0」。その得点を従属変数とし、年齢(4)×群(3)の分散分析を行ったところ、群の主効果が見られた( $F_{(2,205)}=3.22, p<.05$ )。また、交互作用が有意傾向であった( $F_{(6,205)}=1.99, p<.10$ )。年齢の主効果は有意でなかった( $F_{(3,205)}=1.09, p>.10$ )。群の主効果についてLSD法による多重比較を行った結果、IC群・PO群はNP群と比べて有意に得点が高く、「それは魔法なんだよ」という説明を日常において行うことが多いことが分か

った。Figure 3は魔法的回答の平均値を群間で比較したものである。この結果は、魔法的思考や信念を容認している家庭の子どもほど空想の友達や事物の擬人化といったファンタジー活動に従事し易いことを示唆している。

さらに、子どもが親に科学的説明を要する質問をする程度についても同様に、評定の結果を得点化し、分散分析を行った。その結果、年齢の主効果が見られた( $F_{(3,205)}=2.75, p<.05$ )。群の主効果、交互作用は有意でなかった(群の主効果 $F_{(2,205)}=0.05, p>.10$ ; 交互作用 $F_{(6,205)}=0.70, p>.10$ )。年齢の主効果についてLSD法による多重比較を行ったところ、3歳未満児は他の年齢と比べて有意に得点が低く、親に対して科学的質問をすることが少ないことが分かった。Figure 4は科学的質問の平均値を年齢別に比較したものである。この結果は、科学性への関心が加齢に伴い上昇することを示唆しているが、しかし、3歳未満児における得点の低さについては、単にたくさん質問するほど言語が発達していないということもあり、結果は慎重に扱う必要があるだろう。

### まとめ

本研究は、わが国の空想の友達現象に関する新たな基礎的なデータを提供し、具体的な事例を紹介すると

ともに、前報の富田・山崎(2002)で得られた結果について追試することが目的であった。調査の結果、前報で得られた結果はおおむね繰り返された。空想の友達、事物の擬人化、なりきり遊びの出現率はそれぞれ9.7%、56.7%、82%であり、空想の友達のキャラクターは憧れ型・仲間型を特徴とし、事物の擬人化は世話型を、なりきり遊びは憧れ型を特徴としていた。また、これらの特徴は男女によって違いがあり、男児は女児に比べ、自分よりも能力の高いキャラクターを創作しやすい傾向があるのに対して、女児は男児に比べ、自分よりも能力の低いキャラクターを創作しやすい傾向があった。これは男児なり女児なりの憧れや夢のあり方が反映されたものと推測される。さらに、空想の友達を持っていたり、事物の擬人化を行う子どもは一人っ子や第1子に多いことが示された。また、それらの子どもたちは家庭での言語的交流において、親による魔法的説明を比較的頻繁に受けていることが示された。

空想の友達に関する研究はわが国ではまだ少ないが、絵本や児童文学、児童まんが、アニメ映画などに目を向けると、空想の友達に類似した要素を持つキャラクターが登場するものも多く、我々日本人にとっても意外と身近な話題であるということに気づかされる。例えば、藤子・F・不二雄の『ドラえもん』や『オバケのQ太郎』、宮崎駿の『となりのトトロ』などはその最たる例とは言えまいか。藤子・F・不二雄の作品(藤子, 1997)では、ごくありふれた家庭の日常に非日常のキャラクターがやってきて、主人公と同居する。そして、主人公は非日常のキャラクターから夢や希望、勇気や自信、幸福感や満足感を与えられるのである。また、映画『となりのトトロ』ではトトロが登場する場面は4つあるが、これらはいずれも空想の友達が出現する条件と重なっている。空想の友達は、夢や憧れの気持ちが空想者において高まったときや、寂しさや不安な気持ちが空想者において高まったときに現れる場合が多い。映画の中でも、4歳の妹メイが一人でごっこ遊びをしている最中に、はじめてトトロに出会い、次に、小学校4年生の姉サツキとメイが雨の降る薄暗い森の中、父親の帰りを待っているときに現れる。このトトロの登場の仕方は、まさに空想の友達出現の条件と当てはまるのである。

空想の友達について研究する上で、これら児童作品はたくさん示唆を与えてくれると思われる。今後の研究では、調査研究と並行して、なぜこれらの児童作品が子どもたちから絶大な支持を得られるのかを、空想の友達という観点から分析・考察することも必要ではなからうか。そのことによって、空想の友達が幼児期・児童期においてどのような発達の意味を持つのか

も明らかになるであろう。空想の友達研究のさらなる展開が期待される。

## 文 献

- 麻生 武 1989 想像の遊び友達：その多様性と現実性 相愛女子短期大学研究論集, 34, 87-135.
- 遠藤利彦 1990 移行対象の発生因解明：移行対象と母性的かかわり 発達心理学研究, 1, 59-69.
- Gleason, T. R., Sebanc, A. M., & Hartup, W. W. 2000 Imaginary companions of preschool children. *Developmental Psychology*, 36, 419-428.
- Harter, S., & Chao, C. 1992 The role of competence in children's creation of imaginary friends. *Merrill-Palmer Quarterly*, 38, 350-363.
- 藤井京子 1985 移行対象の使用に関する発達の研究 教育心理学研究, 33, 106-114.
- 藤子・F・不二雄 1997 藤子・F・不二雄の世界：完全版・ワンダーライフ・スペシャル 小学館
- 犬塚峰子・佐藤至子・和田香誉 1991 想像上の仲間に関する調査研究 児童青年精神医学とその近接領域, 32, 32-48.
- 川戸由季 2002 Imaginary Companion の実態と発達の規定因を探る 九州大学大学院教育学研究科修士論文発表会原稿(未公開)
- 川戸由季・遠藤利彦 2001 Imaginary Companion の実態を探る 日本教育心理学会第43回総会発表論文集, p.224.
- Litt, C. J. 1986 Theories of transitional object attachment: An overview. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 383-399.
- Manosevitz, M., Prentice, N. M., & Wilson, F. 1973 Individual and family correlates of imaginary companions in preschool children. *Developmental Psychology*, 8, 72-79.
- Rosengren, K. S., & Hickling, A. K. 1994 Seeing is believing: Children's explorations of commonplace, magical, and extraordinary transformations. *Child Development*, 65, 1605-1626.
- Singer, D. G., & Singer, J. L. 1990 *The house of make-believe: Children's play and developing imagination*. Cambridge, MA: Harvard University Press. (高橋たまき・無藤隆・戸田須恵子・新谷和代訳 1997 遊びがひらく想像力：創造的人間への道筋 新曜社)
- Singer, J. L. & Singer, D. G. 1981 *Television, imagination, and aggression: A study of preschoolers*. Hillsdale,

N.J.: Erlbaum.

Svendsen, M. 1934 Children's imaginary companions.  
*Archives of Neurology and Psychiatry*, 2, 985-999.

立花 隆 1994 臨死体験 文芸春秋

Taylor, M., & Carlson, S. 1997 The relation between individual differences in fantasy and theory of mind.  
*Child Development*, 68, 436-455.

富田昌平 2002 子どもの空想の友達に関する文献展望 山口芸術短期大学研究紀要, 34, 1-18.

富田昌平・山崎晃 2002 幼児期の空想の友達とその周辺現象に関する調査研究(1) 幼年教育研究年報, 24, 31-39.

Winnicott, D. W. 1971 *Playing and reality*. London:

Tavistock Publication. (橋本雅雄訳 1979 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社)

#### 付 記

- 1 本研究は、石丸佳奈・永崎愛子・西 綾子・藤井明美の4名が卒業研究(平成13年度)として実施し採集したデータに、著者が新たにデータを加え、再分析したものである。
- 2 本研究は、中・四国保育士養成協議会による教員研究費(平成13年度)の助成を受けた。
- 3 調査に協力して下さった幼稚園・保育園の先生方、保護者の皆様に深く感謝いたします。

### 資料：空想の友達についてのエピソード

【事例1】(2歳7ヶ月, 女児) 友達という感じでもないのですが、本人は「安岡おいちゃん」と呼んでいます。(安岡に親戚がいるわけではありません。誰も“安岡”なんて行ったこともないです。) このおいちゃんは最近急に登場しました。よく家で自分の玩具(プラスチックの箱)を電話に見立てて、そのおいちゃんに電話しています。「あー、安岡おいちゃん?!...うん...うん...そうなん」とか一人で言っています。ときどき安岡おいちゃんが私たちに代わってくれと言うそうなので、代わって話すふりをするるととても喜んでいきます。

【事例2】(4歳3ヶ月, 女児) 名前は“あり子”(女の子)。小学生でかわいい女の子だそうです。いつも一緒におままごとをして、あり子ちゃんにご馳走しています。もう一人“まるきくん”という男の子がよく出てきます。小学生です。最近“くいちゃん”という幼稚園の女の子も出てきます。私もあり子ちゃんとまるきくんのことは、よくお話を聞いてあげるようにしています。

【事例3】(4歳3ヶ月, 男児) 幼稚園に入園する前に、「僕には幼稚園に、せきやくんとはきやくんという友達がいるんだ」とよく言っていたので、そのときは話をあわせて、「じゃあ幼稚園に行くの楽しみだね」などと言って、その子の存在を認めてあげていた。

【事例4】(4歳5ヶ月, 女児) 2人目の子どもが生まれて、1歳くらいのとき、夕食時に2, 3回ほどでしたが、自分のイスの隣に向かって、「〇〇ちゃん、一緒にご飯、食べようね」と話しかけていました。名前は忘れましたが、女の子でした。その後は現れません。

【事例5】(5歳6ヶ月, 女児) 妖精のような存在です。眠たいときは「アクビン」や「ネムタイ」がやって来て、お話をしました。夢の中で一緒にほうきに乗ったり、空を飛ぶそうです。他にいろいろな妖精が、悲しいときやおなかですいたときに来ました。性別はそれぞれです。上の二人の子の時も、それぞれ空想の友達がありました。家族、特に母親は、一緒になって話をしたり、姉妹全員の友達として、日常生活でごく自然に話題に入れていました。

【事例6】(6歳2ヶ月, 女児) りなちゃん(同い年)、かなちゃん(りなの姉)、小郡のケンタッキーの近くにすんでいる。岩国に引っ越したこともあるらしい。さかちゃん(一つ上)、ななちゃん(さかの姉)、宇部に住んでいる。いずれも「夢の中の透明のお友達」で、最初にりなちゃんと公園で出会ったらしい。最近あまり彼女たちの話をしないが、年少の頃は実在の友達に誘われたが行きたくない(来てもらうほうが好きだったので)ときなど「だって、りなちゃんと約束してるから」などと言っていた。私(母)は、彼女たちのまねをしたりしていた。